Literature cited

Makino, T. 1901. Bot. Mag. Tokyo **15**: 143-144. ——. 1902. Ibid. **16**: 214. ——. 1910. Ibid. **24**: 72-73. Uhl, C.H. & R. Moran. 1972. Cytologia **37**: 59-81. Yuasa, K. 1969. Japanese Encycl. of Horticulture (Publ. by Seibundo Shinkosha, Tokyo) **4**: 2004-2008.

* * * *

アジア産マンネングサ亜科の分類誌を東京大学理学部紀要第3類（植物学）に発表中（第1部は 12: 337-405, 1980）であるが，それに先立ち日本産の種類を1981年出版予定の佐竹義輔，大井次三郎，北村四郎監修「日本の野生植物」で解説した。その際，未発表の学名を若干採用せねばならなくなった。そこで本稿では新学名発表に必要な措置と主な論拠を記し，詳細は上記分類誌や同書に委ねることとする。

1. ナガサキマンネングサは *Sedum Alfredii* Hance（シナマンネングサ）から別種として区別した。シナマンネングサは萼片が離生し距をもつが，ナガサキマンネングサは基部で合生し萼筒をつくり距がない萼をもつことが両者の最も大きな違いである。

2. *Sedum acre* L. の東アジアの対応種と考えられるコゴメマンネングサ，メノマンネングサ，ムニンタイトゴメ，タイトゴメなどを唯1種（命名上コゴメマンネングサを基準種とする）の種内変異と考え，メノマンネングサ，ムニンタイトゴメ，タイトゴメを亜種，ミヤママンネングサをメノマンネングサの変種として扱う意見を述べた。

3. ヤツガシラをツメレンゲの品種とした。

4. 北海島に特産するコモチレンゲ（レブンイワレンゲはその異名）はイワレンゲと同種で，その変種と見做すのがよいと思う。*Orostachys aggregeatus* (Makino) Hara コイワレンゲはこの変種とは関係なく，東アジアに広く分布する *O. malacophyllus* (Pall.) Fisch. の変異の中に含まれる。

5. エッチュウミセバヤをミセバヤの変種とした。

□堀田満：**植物の生活誌** 249. pp. 1980. 平凡社. ¥1,200.「月刊百科」（平凡社）に，植物のくらしとして，1977年1月号から1979年3月号まで連載されたものを主体として編集されたもの。24名の執筆者である。各自勝手に書いているが，それぞれのくせがでていて面白い。この種の著作は，従来は比較的目新らしい事実を挙げることが，おおよその仕来たりだったが，これでは分類形態よりも，生態の方に重点がおかれたし，それがまた存外注目をひいたのではないかと思われる。アカマツ，タンポポ，イネといった，ありふれたものの新らしい面が注目をひく。（前川文夫）